



Title	観光創造学体系化の試みとCBT/PPP再考
Author(s)	西山, 徳明
Citation	北海道大学観光学高等研究センター共同研究会「観光創造研究会」設立準備会, 「観光創造学を考える」研究会録. 2013年11月23日, 24日. 北海道大学遠友学舎., 6-19
Issue Date	2014-07-01
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/56570">http://hdl.handle.net/2115/56570</a>
Rights(URL)	<a href="http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a>
Type	proceedings
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	02_1nishiyama.pdf (発表)



[Instructions for use](#)

## ◆研究発表 2

## 観光創造学体系化の試みと CBT/PPP 再考

北海道大学観光学高等研究センター

西山徳明

## 現在の研究領域とプロジェクト

本日は、ご発表の先生方に 3 つの宿題を出して発表をお願いしています。1 つ目は、自分の取り組んでいる研究領域やフィールドについての短い説明、2 つ目は、自分の研究は観光創造学といかなる関係にあるのかについて、そして 3 つ目は、現在取り組んでいる研究テーマの中で、話題＝トピックスとして本日議論してほしいものを挙げる、というものです。自分の出した宿題ですから、私もそれに沿って発表します。

まず取り組んでいる研究領域についてです。私は工学部建築学科の出身で、民博（国立民族学博物館）の研究会では、当時まだ若い中で石森研究会に出るのは本当に恐れ多く、いつも隅っこに座っていました。ときどき張り切って発言すると、使っている言葉の定義がよくわかりませんか、どういう概念に基づくのですかというようなことばかりだったため、石森先生から後でよく叱られました。「なんで工学部の人間はそんな定義だの枠組みだのにこだわって、せっかく広がりつつある豊かな議論を狭い方向に持っていくのか、黙って聞いておれ」と。そういうことを言われたのを覚えています。しかし、これは我々工学系の使命でもあります。今日も石森先生からは、「ああ言っていたのにまた・・・」と思われるだろうと視線を感じつつ、本日の観光創造学体系化の資料（図 2）も書いている次第です。

私自身の研究テーマは、資料にもあるように、文化財、町並みなど、多種多彩の文化遺産のマネジメントに関するものがメインです。たった今やっていることを羅列しているだけですが、1 つは文化遺産マネジメントに直接関わることとして、世界遺産があります。そこに並べて書いているよ

うな遺産を、どう価値づけたら世界遺産として説明できるかということ、実際に相談を受けてやっています。阿蘇の文化的景観や北海道の北の縄文遺跡群に関しては、遺産そのものの全体の価値づけについて、そして長崎や九州・山口、岩国に関しては、構成資産となっている地域のマネジメントや価値づけの相談に部分的に関わっています。それから、世界遺産にすでになっているところの計画をつくるという話では、今日出席している麻生美希先生と共同して、白川郷の世界遺産マスタープランというものを作りましたので、回覧させていただきます。

同じように、JICA との共同で取り組んでいるヨルダン、エチオピア、ペルー、フィジーの事業でも、すでに世界遺産になったもの、あるいはこれからなるもののマネジメント計画や観光開発計画を作るということを専門として依頼を受けています。

あるいは、世界遺産だけではなく日本の文化財保護法に基づく文化的景観の調査研究についても取り組んでいます。これについて今日はお話しできませんが、お手元の資料に書いてあるとおりです。それから文化庁で、文化審議会の企画調査会という文化財行政の方針を決める特別な会議を、石森先生の座長の下でやらせて頂いたときに、発議したものが、その後「歴史文化基本構想」という文化財行政の政策になっておりまして、この施策を展開している地域に対してアドバイスや調査をしています。それから、リビング・ヘリテージの保護や観光マスタープランの作成ということも、白川村以外にも、平取町や美瑛町でも今後、観光創造専攻として学生さんたちも巻き込んでやっていこうと思っています。ここまで観光の話があま

り出てきませんでした。文化遺産とツーリズムの関係ということでは、民博の研究会の最後に報告書が出ています。私は 1992 年、民博の共同研究会でエコミュージアムという概念に出会いました。それまでずっと地域で「これがまちづくりだ」と信じて一生懸命にやってきたものが、このエコミュージアムというアイデア、概念に結実していると思い、これを一生懸命に勉強しました。その概念を、ここに書いているような地域で今まさに展開する研究をしています。そして後ほどお話しする CBT/PPP の話です。それから地域の景観、これも私の 90 年代からのメインのテーマですけれど、景観の保全と形成、近年では景観法という法律に基づく、景観計画の策定と運用に関して研究をしています。それから CATS に来てから取り組み始めた研究として、まさに石森先生が提唱された観光創造士、及び観光認証制度に関して、観光庁や文部科学省から北大が受けている期待に何とか応えたいと考え、慣れない分野ですが CATS の先生方と協力してやっているところです。以上が、私が現在行っている研究の全体像です。

## 観光創造学体系化の試み

### ～観光イノベーションと観光デザイン

続いて、ここからは話すのが恐ろしい内容なのですが、今日奇しくも、石森先生から、観光創造学とはある意味、人間観光創造学、あるいは地域観光創造学、基礎観光創造学／応用観光創造学があるのではないかということ、それから観光創造とは何か、innovation か invention か revelation かというお話をいただきました。私はずっとこのことを考えていて、今日少し、この 1 年間で閃いたこと、荒唐無稽かもしれないし的外れかもしれませんが、ぜひ皆さんにお話を聞いていただき、勇気を振り絞ってお話しします。実は、観光創造学を建築学とのアナロジーで考えると分かりやすいと思い立ちました。お話ししたように私は建築学出身ですが、建築学は工学の中でも最も分野が広くてわかりにくいと一般的に思

われています。土木学とか農学であればわかるのですが、建築というのは、建物を建てるといえばそれだけですが、実は建物を 1 軒建てるというのは、いろいろと大変なことです。その建築学というものと観光創造学というのは、実は言葉の発想として似ているなと考えました。まさに形態が似ていると思うのです。建築学というのは、建物（たても）の学とは言わず建築（けんちく）学と言います。建築学というのは建物を築造するための学問体系を指し、その意味で言うと、観光学という言葉がこれまで tourism study の訳語として使われてきましたが、石森先生がご提唱の「観光創造学」という言葉を見てみると、これはまさに「観光」を学問するのではなく「観光」をいかに「創造」するかを考える学問なのですから、建築学と似ているかもしれないと思ったわけです。

そこで次に考えたのは以下です。科研費に今年から大変嬉しいことに、観光学という分野が種目に入りました。これは大変なことです。しかし資料の表を見るとわかるように、並べられたキーワードを見ると分かりにくいですし幅が狭くなっています。もちろん観光学は出来たばかりですから仕方ないのでしょう。一方で建築学会という会員で 15,000 人くらいいます。それに比べると規模が小さいのは仕方ないのですが、比べて見てもらいたいのは書かれている内容です。建築というのは、一番上に建築構造・材料という細目があって、建築環境・設備、都市計画・建築計画、建築史・意匠とあります。大きく分けると、建築学というのは、建物が壊れないように、壊れて人を殺してしまうことがないように、構造力学という建物の構造を考える分野がまずあります。次に、建物自体を設計する時は、一番下の方にある建築計画とか都市計画が必要です。建てる建物は都市のどこに位置するのか、建つ建物はどのような姿であるべきかを考える、言い換えればどんなデザインであるべきで、それは地域や都市の文化の中にどう表出していくべきかを考えるのが、下の意匠とか建築史に当たる分野です。要は、下の 2 つを総称

して計画分野と呼び、この分野で設計されそれを構造という分野が支えて具体的な安全性を確保する。そして環境というのは何かというと、建築・環境・設備というのは、光とか音とか熱とかを設計します。要するに、人が住むためのより快適な空間をつくる学問分野です。こういう分野ごとの役割が確立し、この3つの分野が寄り集まってはじめてひとつの建築ができるのです。これが欧米に行くとは異なります。お話しした計画という分野がいわゆるアーキテクチャー（＝建築学）という学問分野であって、それ以外の構造と環境の分野はエンジニアリングであると分類されますが、日本ではこれを全体としてまとめて1つの学問体系として扱い、これを建築学と呼びます。これは非常にわかりやすいのです。見事に分担されていて、専門家も綺麗にこの枠ごとに全部別れます。ところが一方の観光学のキーワードを見てみると、(1) ツーリズム（観光学原論）、(2) 観光資源、(3) 観光政策、(4) 観光産業、(5) 地域振興、このあたりはまだ分かるのですが、(6) 町づくり、(7) 旅行者、(8) リゾート、(9) 景観、そして果ては(10) 世界遺産です。これは誰がどういう風につくったのかわかりませんが、これではどうすれば観光学の体系化につながるのやらさっぱりわかりません。そこで体系化を観光創造学の名のもとにやってみようと思いだめたのがこの1年くらいです。次の資料(図1)は、先ほど真板先生が言及された石森研究会から10年間続いた民博共同研究会の初期の頃に、SER（国立民族学博物館調査報告）の中で私が提示した自律的観光の枠組みです。今見るとかなり恥ずかしいもので、いかにも工学的なところも多々ありますが、一応はここからスタートしているということをご理解頂けます。私は当時、観光という活動をデザインするということは、観光客を迎え入れる空間を設え、そこで演出（パフォーマンス）を準備し、そのアクティビティが展開する空間に人を誘致することであると思っていました。これは別に間違っていたというわけではなく、この枠組みはいろいろな論文に引用され、とくに

批判的なコメントはなく、結構使えたと評価されています。またこの枠組みを、地域の観光の発展状況の評価フレームとして使えるという意見も頂きました。いまだに引用してくれる方もあります。しかしやはり今見ると言葉も古いと感じます。この試案を示した後に、さらに民博の共同研究会で学び、様々なフィールドで勉強したことで視野が広がり、さらに観光学高等研究センターにきてからの3年半の学びから、私の視野の中に見えていた観光すなわちかつての「自律的観光の枠組み」は、本来の観光あるいは「観光創造学の体系」という世界の半分には過ぎないということがわかってきました。今回提案する資料(図1,2)で言うと、「自律的観光の枠組み」の部分は、図の下方の「観光デザイン研究」に相当します。つまり従前の空間設計が「資源マネジメント」、演出設計が「インタープリテーション」、そして誘致設計が「観光マーケティング」という言葉に置き換えられています。もちろん、ここでは説明されていませんが、その内容も当然、拡大、改変されることとなります。

私はよく石森先生に、「観光創造って英語でなんて正式には言うのですか」と問うことがあります。すると「いや、ちゃんと決めとらん……、creationではないし、やっぱり innovation かな」というような返事が返ってきます。今日のお話もまさに、innovation だけではない、invention や revelation もあるということでした。同時に池ノ上先生の地域イノベーション研究の博士論文に関する議論に参加していくうちに、たぶん innovation という考え方のもとにある理論的な研究と、応用研究というか、ある程度確立した理論や方法論、モデルを地域で実際に展開し観光をつくりだしていくような研究と、2つの大きな流れがあるように思えます。ここでは、前者を「観光イノベーション研究」、後者を「観光デザイン研究」としています。この「観光イノベーション研究」というのは、石森先生の言葉で言えば「基礎観光創造学」であり、すでにある地域の社会や資源、仕組などを、先ほど

「新結合」というお話がありましたが、新しく結びつけてそこに革新を見出す理論研究です。一方の「観光デザイン研究」というのは、石森先生の言葉では「応用観光創造学」です。下の3つは、私は creation ではなく design という言葉を使っていますが、意図された方法論をもってモノや空間をつくりだしていくというのは、まさにデザイン行為であると考え、今回は「観光デザイン研究」という名前を提案しました。

まず、イノベーション研究には、小分類として、一番上に、まったく偶然ですが石森先生が最後に「乞うご期待」と言われたライフスタイル・イノベーションを入れました。「ライフスタイル・イノベーション研究」と名付けています。それから「ツーリズム産業イノベーション」と「地域イノベーション」と提案しました。そして研究テーマというところ書いているキーワードは、実は観光創造専攻ご担当の先生方のシラバスを盗み見て、そこに書かれている先生方のキーワードをなるべくもれなく取り出し、振り分けたものです。もちろん当てはまるキーワードが全く無いというのも困るので、私が勝手に追加しているものもあります。たぶん観光創造の先生方は、「あ、これは自分のキーワードだ」と一目でわかると思います。これを見ると、ずっとイノベーション研究の方が充実しています。ただし、ツーリズム産業イノベーションについては、私が追加したものはあまりありません。それからインタープリテーション研究も、エコミュージアムなどにはありますが、言葉として観光創造の先生方のキーワードからはあまり見いだせませんでした。一方で、ライフスタイルに関わるもの、地域イノベーションに関わるものは非常に充実していることがわかり、我が観光創造及び CATS の得意不得意の分野がわかってしまします(笑)。私の考えでは、個々の研究者が、この観光イノベーション研究と観光デザイン研究のどちらかに所属しているということではなく、常に両方を行き来する方が学問の発展によいと考えます。一人の研究者がどちらかにいるというわけではな

くて、イノベーション研究、理論研究をやりながら、それを地域なりフィールドに応用します。デザイン研究の中で共同研究などしながらやっていて、それがまたイノベーションというか基礎理論に戻ってき、それが社会に還元されていったときに、右側の方に進みます。たとえばライフスタイル・イノベーション研究というものは、社会に対して何を還元できるのかということ、新たな旅、ツーリズム、ライフスタイルの提案や、新たなコミュニケーションの提案、人生や文化や社会の新たなものの見方の提示、それからツーリズム産業はここに書いてあるようなもの、そして地域イノベーション研究は、まさに観光創造士制度の設計や、地域における新たな観光マネジメント組織の提案やベンチャー・モデルの提案ということになり、こういうものが右側へ進み、観光政策・都市政策の提言につながっていくのではないかと考えられるわけです。

そして下の方、従来私が観光活動設計と呼んで考えていたようなものは、ここにあるように資源の価値の発見、評価、マネジメントが相当し、先ほど石森先生が言及された、invention あるいは revelation、発展というものが出来るかもしれない。こうやっていろいろなシステムや制度、それからハード的な環境を、どうすべきかということ提案していくことも社会への還元と思います。インタープリテーションや観光マーケティングにおいても、まだ考えきれていないのですが、あくまでもここでは枠組みないしフレームとして見ていただきたいということで、こういう社会への還元の方法があるのではないかとというのが、私のアイデアです。つまりこのへんは、観光地域づくりを具体的に支援するというかたちで社会へ還元していくことなのではないかと考えています。これが、私の研究と観光創造学との関係を説明する代わりにの提示です。今回はこういう枠組みを提示させていただき、これはこんなことが漏れているのではないか、あるいは重複しているのではないか、言葉がおかしいのではないかなど、今からの議論の

ネタとして皆さんに議論いただけないかと思っ  
ている次第です。私はこれまでずっと、石森先生や  
皆さんと議論していく中で、自分は観光研究のど  
こにいるのだろうと悩んできましたので、それを  
無理やり今回はこういう枠組みで考えてみたわけ  
です。

### CBT, PPP の再考と SCC

次は、私の方からトピックとしてお話しさせて  
いただきたい内容です。CBT や PPP などアルファ  
ベットの羅列で申し訳ありません。最近 JICA の仕  
事で国際協力に取り組み、アフリカのエチオピア  
やヨルダン、ペルーといったところに通っていま  
す。エチオピアやペルーは特に貧しい地域で、本  
当に貧しい農村地域、しかしその周辺に世界遺産  
や、世界遺産級の資源があります。そうしたある  
意味特殊な環境ですが、そういう場所に入り込ん  
で、集落で観光開発の支援をし、その地域に住ん  
でいるコミュニティの力を遺産保護につなげてい  
こうという目論見です。途上国において、政府の  
力やお金がないところでは、地域住民やコミュニ  
ティの力を使って遺産を保護し、結果として住民  
が豊かになる、またその結果、遺産の価値が守ら  
れる、こういう関係をなんとか作りたいというこ  
とを大きな目標として、いま国際協力に取り組ん  
でいます。

しかし、エチオピアに2年前に入り、最初にぶ  
ち当たったのは、地域に住んでいる方々からの強  
烈な批判、というか海外ドナーに対する批判でし  
た。その内容は何かといえば、ドナーは皆、コミ  
ュニティの発展のための国際協力といってやって  
くるけれど、結局彼らアメリカやオーストリア人  
は、集落に来て支援をするよと言いつつ、結局、  
器用な(めざとい)住民、つまりすぐに飛びつい  
て、使える住民、有用な住民を、一部引っ張り上  
げて、そいつらと組んで観光をやって、そいつら  
だけが金を儲けて、結局集落の中は貧富の差が激  
しくなるだけで、ほとんどの住民は置いてけぼり  
であると言うのです。お前ら JICA の人間、日本人

がやってきて、集落みんなが豊かになる観光をや  
りましょうと言うけれど、なんでそんなことがお  
前たちだけにできるのだ、そんなことは綺麗事で、  
お前らがやる協力というのがコミュニティに裨益  
するというのなら、なぜ裨益するのかちゃんと説  
明しろと、お爺さんもいれば、若い男性も、女性  
も、老若男女問わない村人たちから、青空の下で  
の住民集会で突き上げられました。貧しい農村に  
行ったときに、みんなが口々に言うそういう批判  
に晒されたというのが、このレジュメの発端であ  
るということをまず説明させてください。私は、  
ここに書いてあるような、CBT=コミュニティ・  
ベースド・ツーリズムというのは、こういう人た  
ちをも説得できるものであるべきだ、そうしたい  
と、強く思って今研究に取り組んでいます。その  
テーマについて先般、科研費の申請を出したので  
すが、その申請書の一部を持ってまいりましたの  
で、読みながら説明します。

私は、エコツーリズム、エコミュージアムとい  
う民博の研究会でまさに勉強した内容を、方法論  
として、中心的な理念として使っていますが、そ  
れらを実現するためには、CBT や PPP というもの  
の考え方と組み合わせなければ、先ほど言ったよ  
うなことは出来ないということを書いています。  
エコツーリズムとは、本来、一般に理解されてい  
るような、単に自然を保護しながら経済利益をあ  
げる観光開発手法ではありません。その根本的な  
理念というのは、訪問者に遺産価値へのアクセス  
を保証し、真正なるインタープリテーションを行  
うこと、それによって適切な対価も得るし、訪問  
者が価値に対して正しい理解をし、結果として自  
然遺産などのファンとなって、それを愛して理解  
した結果として遺産保護を実現していこうとする  
ものと考えています。この基本的な考え方、すな  
わち柵を作って遺産を守るのではなく、価値への  
アクセスを保障することで、遺産を守るという考  
え方が、20世紀に起きた大きなパラダイム・シフ  
トであると私は考えますし、こうした考え方が、  
21世紀においても遺産と観光開発を考える肝心な

パラダイムになっていると考えています。ですから、エコツーリズムを、便利で使いやすい打出の小槌と勘違いして使い潰してほしくないという思いがあります。それから、エコミュージアムについては、世界で様々な人が様々な解釈で使っているので、実は非常に難しいのですが、その誰に言っても納得するのは以下の5つかなと思います。まずテリトリーがある。それからテーマがある。屋根のない博物館として現地で本物を保存する。そして最初のお客さんは地域住民自身でなくてはならない。誰かを迎え入れて金を取るためのものではない。まずは地域住民が楽しめなくてははいけない。そして、正式な博物館活動である。科学の目に晒され、キュレーターがきちんと関わるものである。こういう共通原則があります。これは上に書いた本来のエコツーリズムの理念を、コミュニティ基盤の遺産管理として展開する際に、非常に具体的かつ理想的なシステムである、と私はエコミュージアムを捉えています。それから、CBTというのは、小林先生と山村先生が中心となって取り組まれてきたものとして、CATS 叢書に CBT の報告書がありますが、この中には、「CBT とはコミュニティを基盤とし、コミュニティが主体性をもって自律的に観光振興を進めていくあり方」として定義されています。しかし先ほど申し上げましたように、これまた途上国の現場では、CBT を標榜していても、実際にはほとんどの場合で一部の住民にしか裨益せず、その結果、貧富の差の拡大や共同体意識の希薄化、崩壊まで引き起こしているという現実があります。CBT というのは、言うは易しですが、遺産観光に関わるコミュニティがこうした事態に陥らないように、コミュニティの利益を守る仕組みを構築し、コミュニティ全体への裨益、これはもちろん全体へ同じお金を配るという意味ではありませんが、しかしコミュニティ全体に関わり方の濃淡を理解したうえで、全体に裨益が生じるようなあり方を考える必要があります。そのため、エチオピアで私が考えているのは、みんなで相談して、決断する。どんな観光を

やっていくかを、コミュニティみんなで考えるというのが1つ。それから、頑張っって現場でやる人は一部であっても、得られた収益は必ず公的な財布にプールされて、それが集落全体の、たとえば小学校の修繕費用とか、橋の修繕費用とか、1台のトラックが必要なら買うとか、そういうかたちで、公で担保した収益のファンドをつくるなど、そういうことも必要だと考えています。

それから、PPP というのは、ちょっと理屈っぽいですが、もともとはイギリスで生まれた PFI という考え方が発展したものです。また PPP は、60~70年代のアメリカで生まれた成長管理というものの考え方の展開・発展形としてあるものでもあり、要するにヨーロッパ、アメリカ双方から生まれてきているのですが、いずれをルーツとするものも理念は一致しています。すなわち、これは普通の解釈とはちょっと違うかもしれませんが、従来は公共の役割と思われていた公益目的の事業、例えば貧困削減や自然環境保護、遺産保護などの事業を、公的機関（パブリック・セクター）の権限と民間部門（プライベート・セクター）の事業遂行ノウハウやファイナンス力などを相乗効果的に活かすことで、より合理的かつ高品質なレベルで事業を実現することを目的とする取り組みで、その目的達成のために官民が構築する相互尊重の関係です。したがって本研究では、途上国での CBT 開発に必要な組織をこの PPP 理念に基づいて提案しています。つまり、公益目的を掲げる非営利の地域運営組織を立ち上げ、運営を行うことで、従来は public の役割とされてきた公益目的の事業を、この理念に基づいて官民協働で実現するということを考えています。

しかし、官民協働という言葉は今、非常に安易に使われています。何か官がやりたいことを民間と協力してやれば官民協働だとか、地域のまちづくりを協働でやりますとって、要するに昔でいうところの「共同」と同じ使われ方をしたりと、本来素晴らしい意味、厳しい意味をもっている言葉が安易に使われています。これはエコツーリズム

ムと同じだと思います。そういうことを私は非常に嫌います。そうではなくこういうきちんとした定義でやるということが求められます。

そして最後ですが、この CBT を持続的に展開していくには、strategic carrying capacity=SCC が必要という考えです。従来は carrying capacity というと、環境が受け入れ得る絶対的な受け入れ容量や、観光客が満足を感じる限界などを指標とした限界受け入れ容量のことをいっていましたが、私はこの strategic carrying capacity という考え方をとらないと、この CBT は実現できないと考えています。これも簡単に言うと、地域社会がまず PPP によって一定の公益目的に基づく組織を作ります。それが観光客受入のための準備をし、開発をし、受け入れていくわけですが、住民が主体となるそうした組織が成り立っていくためには、一定程度以上のお客さんが来てくれなければ困ります。そのためには、その組織が、マーケティングやプロモーション部門が頑張れるような DMO (destination management organization) になる必要があります。その DMO がちゃんとお客さんを確保してくれなければなりません、それが最低どれだけないと、CBT は潰れてしまうかというコミュニティが求める持続的な CBT ビジネス実現のための必要集客数あるいは CBT が逆に遺産保護や貧困削減に取り組む場合に、求められる予算や経費がどのくらいなのかを事前に計算して、それに従来の限界受け入れ容量をミックスした SCC という考え方を科学的に設定せねばなりません。それを実現していくことが必要であるということが、私が一生懸命考えて悩んでいるものです。早口で申し訳ありませんでしたが、以上で私からの発表を終わります。

### 【コメント・質疑応答】

#### コメンテーター1：小林（英）

石森先生に続いて西山先生で、頭がほとんどパニック状態なんですけども（笑）。まず、観光創造

学体系化、これは是非みんな考えていかなければいけない、非常に大事な部分だと思うのですが、最初に石森先生がおっしゃったように、我々は何のために観光創造をやるのかということが、ここに現れてくると思います。この表で気になったのは、ツーリズム産業イノベーション研究が、ライフスタイルと地域と同じ並びでいいのかということなのです。観光を何のためにやるのか、石森先生の話に戻れば、要するに世のため人のためだとすれば、ライフスタイル・イノベーション研究と地域イノベーション研究はマストですよ。ではツーリズム産業イノベーションは何のためにあるのか。我々のスタンスが産業振興ではなく、世のため人のためであれば、それは観光イノベーション研究と観光デザイン研究の間を繋ぐ役割としての産業研究でしかないのではと考えるのですが。観光イノベーションをちゃんとやって、それを橋渡しする機能、産業としてツーリズム産業間イノベーションするというのも大事なことなだけで、この図のように3つ並んでいるのか、その下の置くのか、もう1つ少し研究の余地があると思って聞いていました。

それから、CBT というのは、私と山村先生と石森先生とで3年間研究しましたが、私は以前、真板先生と一緒にエコツーリズムの普及をやっていたのですが、ちょっと日本のエコツーリズムに限界を感じるようになっていて、結局 CBT をしっかりやらないとエコツーリズムは地域に根づかないと考えたからです。先ほどの西山先生のエチオピアの話でいうと、地域全体にいかにお金が戻ってくるかとか、頑張っている人にも相応のお金が入るという二重構造を地域に作らねばならないと考えていて、調べてみると、その仕組みを中国とか NZ でかなり上手くやっているのです。たとえば、間に入ってそのお金を分配する仕組みを作ろうという話がありましたけど、マオリ・ツーリズムでは、各地域にチャリタブル・トラストのようなものを作っていて、そこに一旦利益が上がっていったら、それを地域全体で使おうと。この仕組みはち



よっと使えるなと思っているのと、中国と NZ で研究した結果でいえば、外からのアイデアや考えを受け入れる仕組みが地域に芽吹いていないところに行っても無理だなと。それを受け入れる地域の賢さがないと、外から作っていても結局難しいというのが、その研究で感じたことですね。それは結構、マオリ・ツーリズムをやっている中で一番感じたのは、なぜ観光をやっているのか？と問うと、みんなが観光は vehicle だろって答えるのです。これは手段という意味で、石森先生の世のため人のためと同じで、観光を使って何をやるかを見ていないと CBT も難しい。観光で稼ぐためなのではないと。そこの理解がなかなか難しく、かなりレベルが高くないとそこを割り切って考えられなくて、金儲け観光に走ってしまう。そのために何が大事かという、彼らは生業だといっているんです。生業をしっかりしないと観光はダメなんだと。そういう意味でいうと、CBT による必要集客数とか、限界受け入れ容量も、生業を守るということを前提にして考えていかないと、いくらならビジネスとして成り立つかという発想は絶対にしちゃいけないと思うんです。ここは結構大事なところで、意見が分かれると思うので、ここの考え方をもう少し整理していかないといけないと思います。つまり、石森先生の話に戻りますと、最初にすごくいい質問をされたなとっていて、「観光ルネッサンスは可能か」という先生の問いに私なりに言葉を足すと、観光による、人や地域を変えていけるルネッサンスはどうすれば可能かを考えなさい、という投げかけだと思っています。我々は観光創造の観光と創造の間に言葉を足さなくてはけません。観光で「〇〇」を創造する、という、「〇〇」が自分たちの研究分野やフィールドであると考えるときに、初めて観光創造は成り立つというふうに先生の話をお聞きしました。めちゃくちゃ面白い学問を我々はやらせていただいていると思っています。本当にありがとうございました。

## コメンテーター2：遠藤

私は観光創造学の体系化のところについて私の感想を述べたいと思います。これを見て、かなりすっきりしたところがあって、まずは西山先生の案に感謝いたします。たとえば今、私は白井先生と大迫学術研究員とニセコのプロジェクトに関わっています。(西山先生ご提案の) 研究テーマのところでニセコのプロジェクトをあてはめていくと、上の二地域居住ということはニセコでのロングステイと同義と考えます。実際の現場では約 400 組の人たちが首都圏などから夏にニセコに来ていると聞いています。次のツーリズム産業イノベーション研究という分類でいうと、LCC などでは冬には外国人スキーヤーがニセコに来ます。また、ファイナンスという点では、コンドミニアムの建設や所有を中心に投資が行われています。それから地域イノベーションという点で、キーワードにもある観光の 6 次産業化があります。代表例がニセコの道の駅で、売上は年間数億円にのぼっています。また、ご提示いただいた資料の資源マネジメント研究のところでは、国立公園というキーワードがあります。ニセコのスキー場は国立公園になっているので、これもまさに分類に合致しております。

このように、現在のニセコのプロジェクトを本資料にあてはめると、こういう整理の仕方があるのかと思ったところです。また、自分のやっている研究が多岐に亘っていることが改めてわかり、今回の西山先生ご提案のような枠組みにより、私自身の行っているものの分類もクリアになったところです。

それから、社会への還元という部分。これも今自分たちがやっていることが、どういうことかなと振り返って見てみますと、資料の上から 3 つ目の部分にあると考えます。観光ベンチャーモデルの提案ということで、ここはまさにニセコで白井先生が起業の講義をされているように、いろいろな生業を起こそうといろいろな人が頑張っています。資料の中の資源の部分でいいますと、資源マネジメントを支える法制度ではないですけど、実

は雪崩に対して新雪をどう滑ったらいいかというニセコ・ルールという、1つのローカル制度的なものが出来ています。これも1つのマネジメントの姿であります。このニセコ・ルールに関してはCATSは特に関わりを持っていないのですが、地域でビジネスを行うためには、このルールを踏まえた観光ベンチャーモデルの立案が重要であります。そこで、今回ニセコで行っているCATSの講義が少しでも役に立てば、社会への還元に寄与しているのではないかと考えております。先ほどの建築分野の分類のお話では、材料であるとか、建築環境であるとか多岐にわたっています。たとえば私が家を建てるときに「良い家をください」といっても、建築家でない一般の人の発言の真意は、素材が良いのか、あるいはデザインが良いのか、適切に表現できないものです。同じように観光も、地域では、やっぱり観光を良くしたいとか、観光をしっかりしたいとかのニーズがあります。しかし、その「しっかりしたい」というのが、どこかの部分の、何を「しっかりしたい」のかということを具体的に説明できない現場は少なくありません。

観光デザインの部分なのか、観光イノベーションの部分なのか、どの区別が良いかは持ちえていないのですが、今回の西山先生のご提案のような分類ができれば、共通の物差しをもって、地域の方と観光のお話しできるのではないかと思います。

いずれにせよ、私の思いとしては、観光をする側であるお客さん側と、観光を受け入れる側であるその仕事をしている側、両方が幸せになるような、そんなことを目指して行きたいです。そして、こういう課題に対して、自分はどこのどの部分を解決しているかということ、自分なりにここからは意識したいと思います。さらに、小林先生もおっしゃったように、(観光研究には)基礎と応用があり、さらに両者を橋渡す部分に何かあるのではないかと思います。それについては、ビジネスマンとしての目線から、私なりにいろいろ考え

てみたいと思います。ありがとうございました。

#### コメント：白井

先ほど小林先生が指摘されたように、この体系化の試案の中で、もちろんこういう表が出来たので、これからの議論の叩き台として、いろいろな専門の方々からいろいろなコメントがあるだろうと思うのですが、先ほど小林先生が上の3つを並列にしているのかと言われた中で、1つの解釈として、真ん中の部分だけが少し違和感があると感じています。この中の問題として、「従来の狭義の観光研究」とした部分で、ちょっと違和感があるのかなと。ライフスタイル・イノベーション研究の領域、ないしは地域イノベーション研究ということになると、たぶんそこで考えられる産業面というのは、従来のツーリズムの定義よりも広い分野だと思うんです。あえてここで「狭義の」としたことによって、上と下からすると外れているのかなと。産業的な部分での研究が要るだろうという考えだとすると、狭義の観光研究よりも、もっと広い分野の産業研究ということになると、この3つで収まるかなと感じました。

#### コメント：山村

小林先生からマオリ・ツーリズムのお話がありました。小林先生、石森先生と世界各国をまわらせていただいて、私も一点感じたことがありました。それは、先程PPPという話がございましたが、官と民の協力体制についてです。中国貴州省の少数民族集落を調査していて気付いたことがありまして、CBTが非常に上手くいっている集落に共通する要件があったんですね。それは、行政のリーダーと、地元の伝統的な宗教的リーダーの関係が非常に良く、前者によるトップダウン的な政策の上意下達と、後者によるボトムアップ的な民意の反映とが非常に上手くバランスが取れている点でした。そういう関係性が築けているところでは観光開発は上手くいっていて、上手くいっていないところはそこがギクシャクしていたのです。非常

に興味深いと感じました。

### 回答：西山

ありがとうございます。まず、小林先生と白井先生からご指摘いただいたコメントへの回答ですが、観光イノベーション研究を観光デザイン研究と分けるということが、今回の私の中での発想の飛躍でした。要するに、それまでは観光創造は innovation なのか creation なのか悩んでいたこと自体が違ったのだと思ったということです。むしろ、私はいろいろな機会に石森先生の講演を聞かせていただきながらも、私が担って超えていける部分が1つもないなと感じていました。要するに、石森先生と、全く分野やスタンス、社会に対する考え方が違う。その私が先生の跡を継いで観光学高等研究センターを担うというのはどういうことなのかと、今でも悩んでいます。そういう中で、むしろそれを発展的に解消する考え方、という意味が1つあります。

観光イノベーション研究という場合に、世の中の観光ってどうなっているのかということ、常に、イノベーションを意識して考えるというのが、ダイアグラム（図2）の上の部分なのです。そこである程度確立した観光のあり方、たとえば CBT とはどうかあるべきだとか、エコツーリズムとはどうかあるべきだとかを考えます。しかしそういう理念が確立したとしても、地域はそういうことに未経験ですから、どんな確立した理念や方法論も、地域に入る度にそれは新しいわけです。常に問題が発生し、課題がある中で、またそれを新たに解決しなければならない。これは注文一品生産です。それをやるのがダイアグラムの下の部分、すなわち観光デザイン研究です。そこで理念や方法論を適用してみて、何か起きたら、今度はどうすべきか地域が教えてくれます。その新たな課題をもう一度観光イノベーション研究に持ってきて、従来の考え方ではダメだから、そこで新たな課題を克服する理論を検討します。小さいか大きいかわかりませんが、これは明らかにイノベーション

の繰り返しだろう、と考えたときに、どこでイノベーションが起きていくのかと考えました。確かに白井先生が言うように、()の中身はどうでもいいのですが、当初のライフスタイル・イノベーションという、昔でいえば都市民の余暇レクリエーション研究であったわけです。大都市民を、労働政策として、余暇を充実させるために観光されるという政策的発想があって、それを西山卯三先生や三村浩史先生などがやっていました。これが今や発展して、ライフスタイルになってきたのだなと思います。これは発地サイドの研究と言ってもよいと思います。一方で地域イノベーションは着地型、受け入れ地域において、観光というものを、まさに小林先生がおっしゃったような、生業、これまでの生業や社会構造を、そこに導入すべき新たな観光という、都市との繋がりとか、いろいろな難しい関係がある地域はどのように観光というものを同化して、自らの中に取り込んでいくか、ということをするのが地域イノベーション研究でしょう。これは地域で答を出すことよりも、地域ではいったい何が起こっていて、それがどういうイノベーションに繋がるのかに取り組む研究です。これは地域における研究、地域を素材とする研究です。しかし今までの観光研究は、狭い意味で捉えれば、結局は旅行業者のための、旅行業界のための研究であったという部分が大きいと思います。それを何とかここに入れたかったわけです。()で、こんなことを言ったら怒られますが、()は取っていいと思うのですが、ぜひともいい言葉をこの辺りに嵌めていただきたいのです。一番私が責任を持たずに書いたところなので、皆さまから指摘を受けたのかなと思います。小林先生から、ここに置いていいのかというお話がありましたが、私はそういう意味でここにこの四角を置いたのです。この四角をどう描けばいいのか、またご相談させていただきたいと思います。

CBT に関しても、私にとっても発展途上で、一生懸命に試行錯誤していますので、中国での事例などもさらに具体的に勉強しながら、出来れば皆

さんと一緒に、またフィールドに出ていきたい  
と思います。

どうもありがとうございました。